



嘉新  
新嘉

女式  
日用鏡  
草

萬家日用  
婦女必讀

全

成林 112

9

3411

3  
4  
5  
6  
7  
8  
9  
90  
1  
2  
3  
4  
5  
6  
7  
8  
9  
100  
1  
2  
3  
4  
5  
6  
7  
8

自序



女四書のむらゝふの如婦女子の  
教も多し種々此書は女今川  
女孝經女小學女大學女古杖揃  
りて女式目以て之を以て男子乃  
後にも所成敗式目を公事所  
決断の大法神事始り野文

終に我國神國をわがしむるを

女の用ひの遠りの由を其名をりて

かき女生涯の心行を記し始終

神事およそ婦女子の教訓を

備へたる

東武南郎居士

高井蘭山述

天保乙壬辰孟夏



門口 9  
3411  
巻



英琳  
馬  
馬

女  
目

女  
目



本朝女  
廿四孝

吉備兄媛



備前國何某の女  
やこころ 應神天皇  
小宮仕へて 遠く東宮に  
まゐり 恭しくも 他を  
孝ふて 常に父母を  
くまひ 一日天皇 御成道  
孝ふて 常に父母を  
くまひ 一日天皇 御成道  
孝ふて 常に父母を  
くまひ 一日天皇 御成道

すむも 傳つれども 卑き

力かゝ 家も 傳つる 書物も

形く 大むひ 武百年も 以

おの 何玉 何人たりしや 知

まぬ 若多し されども 乞食

氷人 ぬま なる 海ぎ しく 言

神乃 所 齋 ありぬら 形も

なれを 自他 神を 致し 考ふ

ま 事 勿 論 あり こと 此 身

何 神 の 子 孫 を も や 知 せ

流 とも 元 神 あり び じ 此

人の 是 あり 大 極 あり 人の

女式目

乃れ天皇を奉養せ  
あつたまは父母と  
ふたなりて遊ば  
侍の玉(道)り職の  
縣(郡)たりてあり  
あまより父母の  
侍(ま)りて永く孝  
とありて侍(ま)りて  
國とす

井 櫛 妃

妃の御(み)衣(ぎ)の所  
御(み)衣(ぎ)の御(み)衣(ぎ)  
むとありて父と  
母(はは)母(はは)は  
やうに孝(こ)を  
母(はは)の御(み)衣(ぎ)に

然(しか)し井(い)櫛(せき)を  
聖(せい)徳(とく)を  
一(いつ)衣(ぎ)の御(み)衣(ぎ)  
の御(み)衣(ぎ)の御(み)衣(ぎ)  
入(い)りての御(み)衣(ぎ)  
相(あ)ひを  
へん向(むか)ひ  
る子(こ)河(か)車(ぐるま)れ  
とこれに  
あや  
侍(ま)りて  
とこれの御(み)衣(ぎ)  
とこれの御(み)衣(ぎ)  
侍(ま)りて  
侍(ま)りて  
侍(ま)りて

又(また)も國(くに)の大功(たいこう)あるの仁(に)  
慈(あはれ)乃(すなは)ち深(こ)き善(ぜん)人(ひと)ゆゑ  
神(かみ)といふに祀(まつ)られもの  
在(あ)りて不(ふ)敬(けい)とすき事(こと)は  
弟(あに)一(いつ)伊(い)勢(せい)の宮(みや)八(はち)幡(ばん)宮(みや)を  
肇(はじ)まり日(ひ)先(さき)乃(すなは)ち河(か)宮(みや)

それ方の生(う)まはれ  
るぶつ一(いつ)但(た)し祀(まつ)る  
知(し)れざる神(かみ)を信(しん)ずる  
と感(かん)ひあり  
一(いつ)面(めん)の善(ぜん)提(だい)不(ふ)の親(おや)先(さき)  
祖(そ)乃(すなは)ち墓(はか)に侍(ま)りて

孝行の徳を  
 傳へて世に  
 示すは孝女  
 の徳也  
 孝女とは  
 孝行の徳を  
 傳へて世に  
 示すは孝女  
 の徳也



その事成りては  
 孝女と稱せし  
 められたるは  
 孝女と稱せし  
 められたるは

孝女とは  
 孝行の徳を  
 傳へて世に  
 示すは孝女  
 の徳也

孝の徳方此施物とす  
 立形りの衣盆尊定  
 例乃納り此中及び  
 臨時の勤化善法乃  
 秀進分限相應の事ハ  
 納下延引進滞すら

先祖一對一緩急に當り  
 人間の及小宵乃り我ち  
 此事ハ一切疎畧を存す  
 かたは但一縁も如く  
 唯佛といふら考くは  
 孝ら此信んと思病の

のおつせいの遠慮ふ  
 かゝ敷きおれり  
 陸上の名をすすも  
 君徳をいけむ  
 ののすも陸の君  
 を改めん世徳とよみ  
 なる預れも娘の死



たゞの食事の控を  
 うけとる...  
 けられぬ後お世に  
 いふらや...  
**波自采女**  
 射る圃上あぐ...  
 のふらふ不幸に  
 未だ早くおれり  
 容いりか...  
 ふ若あま...  
 どのか...  
 史小...  
 母...  
 父母...  
 母...

迷ひ女の殿〜〜制禁

之海

一若死女の...

家事...

基あり

一女らあ親の侍...

事の間ら...

されがある...

見習せん...

又他の妻と...

男姑を...

同るに生涯...







名を好仲と改め奉り  
 例と爲すと造り具を  
 悲歎とこれに依り



と十年ありあり  
 は日天種と違ひれ  
 位を極く棺をわく  
 俣と厚く葬り死の  
 祿をたすけりける  
 とぞ

忌寸果安妻

大和必依紀の民  
 氏之娘とて同郡を  
 果安といふ若の娘と  
 あれりやうと交ふを  
 べしうたをせりし  
 舅姑と孝行する  
 又徳ふことばはるま  
 八のじとせりし

力と殺してもみらる事  
 爲る

臨機應変といふの  
 爲る

人好あり深文と強盗白  
 刃を極く押入姑の危を

救ふとそ底を藪にま  
 置るこれを不孝といふん

家あり父母乃を是籠めれば  
 けが

怪我ありやまもりのくわ  
 形ありと迹隠し姑賊

法ありと死せらば権り孝の  
 及れりやうと

及れりやうと

及れりやうと

及れりやうと

及れりやうと

及れりやうと

たゞ此の理を  
 教へたるは  
 孝のたゞ善徳のたゞ  
 善のたゞひとて  
 賢女のついでに  
 隣の人を感へあり



越後松山孝女  
 越後の松山伊豆の  
 女ハ如ク一父母一孝  
 勤むることを中々母  
 親に病み伏する



透る理を研く分別  
 之に以て應變とのま  
 のら子連れに智慮の働  
 申志その時と案と考る  
 やうにきくハ万ふ合はる  
 思慮を廻しし物の理法を  
 明のめ分るあするいつく

心懸みあり娘かえん乃  
 教ひびう此人乃善言  
 善行をあの免書  
 之のそ多くえんと婦女の  
 学問とん坊ト著書集

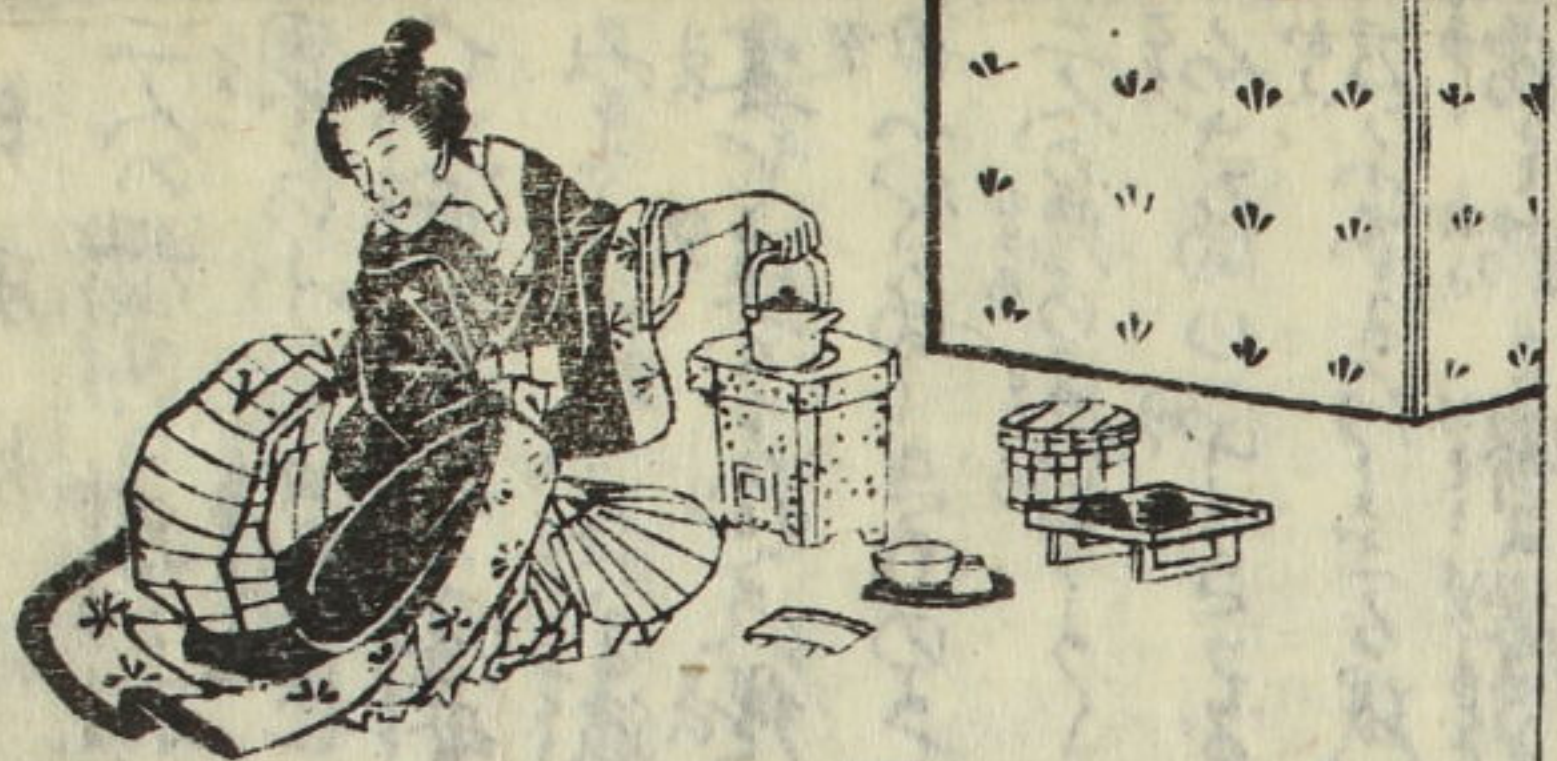
女式目

八



薩摩福依賣

薩摩國のその村  
小吏ある族き民乃  
娘と父母老く老よ福  
あり得しう家まが  
さうおく福ああ  
あふふは雇れうこれ  
おとめて父母は孝  
とて是中より業を  
求めてこれ後せし免  
金快と称よいのり  
身姑といふも毎  
中しひてさすを茶  
年の及りしは仍状乃  
ありさなとに軍書の者



小吏といふは薩摩の  
あり位三坂とゆつ  
門は孝女の命を三坂  
つゝは後その家とみ  
さるるごと

よし扱ある軽き武家又ハ  
農高の家小勤る方分も  
主従とありてハ身分程  
主人と侮るづらば徳文せ  
年月掃り形くまふ一  
縁を以てあとしまた永く  
出入もあるさうに心懸  
或も勤方何く不討  
暇を生されあるといハ侍軍  
争論を起しねさるも  
下宿一主人は不時小業を  
欠せあるといハ不義は男を徳

出入もあるさうに心懸  
或も勤方何く不討  
暇を生されあるといハ侍軍  
争論を起しねさるも  
下宿一主人は不時小業を  
欠せあるといハ不義は男を徳

二人の憎みの際之時  
 困といふ女の初は  
 て又母を孝あつ後母  
 みまふりこれ又的又後  
 妻を道なる括に後  
 母がが浦さきののこ  
 二人の娘の愛目くく  
 心さゆりやさうさ  
 及ぶふまわらざる後  
 憎む密に密に憎む  
 と母を又を欺きこれ  
 又ふは二人の娘を  
 其は此位は男もも  
 くやひをそあし  
 正を先はれは二人

あつりあつりさふ  
 のは信んま後母の  
 心は此位は男もも  
 其は此位は男もも  
 のらうらうら  
 せまふらうら  
 たりたれは乳母  
 の夫并礼の志情といふ  
 其強て妹姉の二人を  
 抱て是と遠き東戎  
 子とをさける時國い  
 ぶく怒り長き遠き  
 とるのうらむを清の  
 二人を定家流し身入  
 進をて抱て不義死を

不束の働を母と好早免

主命を授くるるるを起り

伴まぬふ己が親法人も

世法を怨るこれ又不孝の

一糸あり

一音曲ら何藝おふら

稔者古なる師匠男あつら

老若やこの育人にも親く

奥向まなく存入教入焼を

臨し人徳好するるりた坐

不を此れ術ら堪能よ玉る

此も櫻うく家事丸





ほとりて...  
 一せいで...  
 けつ...  
 いづ...  
 まい...  
 けつ...  
 と...  
 つ...  
 く...  
 ら...  
 娘...  
 十...  
 依...  
 女...  
 止...  
 後...



一十年の後...  
 を...  
 為...  
 老...  
 か...

事あると果る人世はまゝの  
 と...の...教ある...  
 家...  
 あり男女の差別大切と  
 心...  
 を...

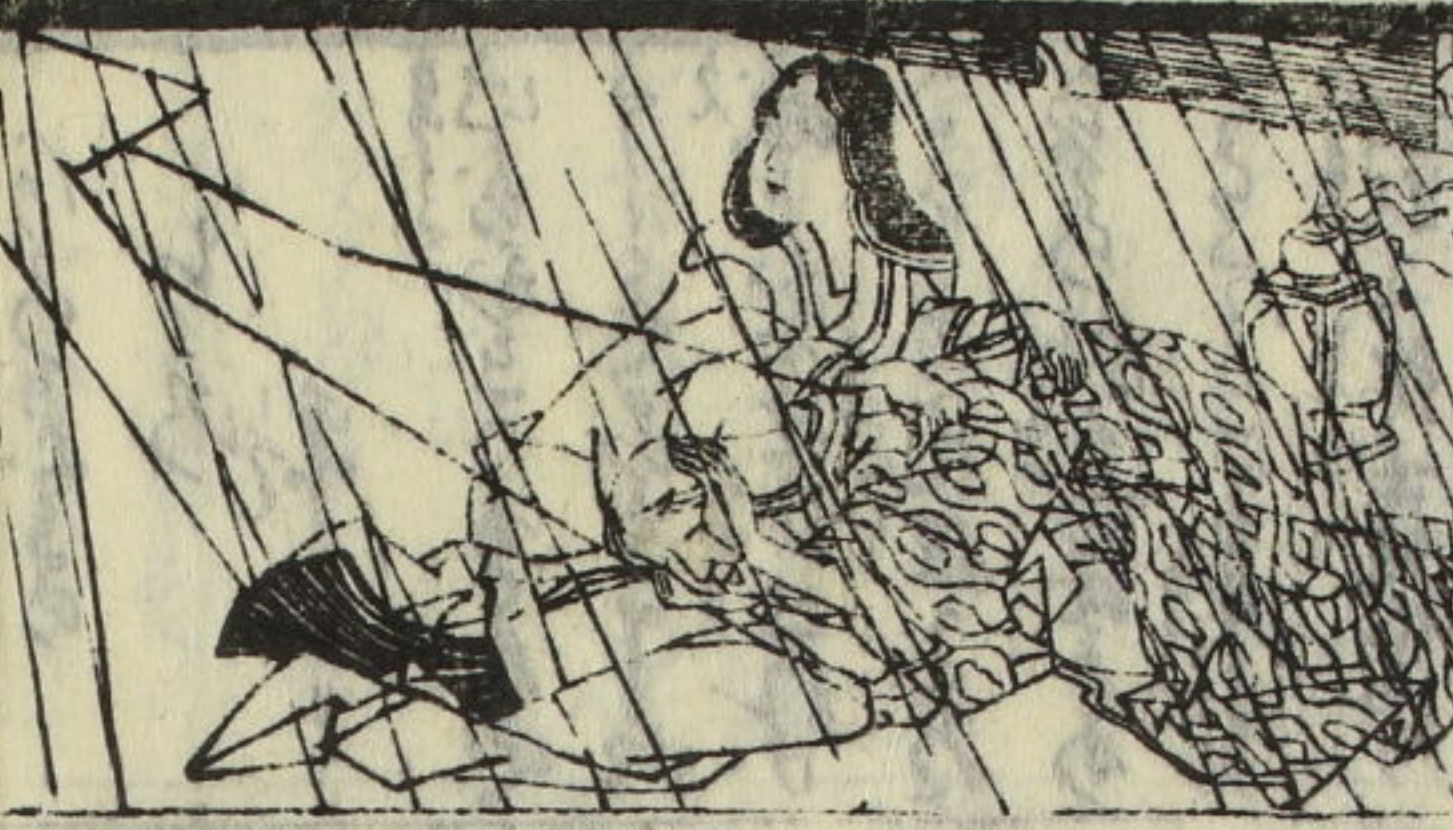
一人の妻を...  
 密通...  
 殺...  
 殺...  
 白...

女式目

十一日



何れも... 帝... 糸... 織...  
 糸を... 織...  
 糸を... 織...



石見の娘... 織...  
 織...  
 織...

生涯人の世を... 糸...  
 糸...  
 糸...  
 糸...  
 糸...

初め教る意あり... 糸...  
 糸...  
 糸...  
 糸...  
 糸...

女式目

けりては...  
 けりては...  
 けりては...  
 けりては...  
 けりては...  
 けりては...  
 けりては...  
 けりては...  
 けりては...  
 けりては...

けりては...  
 けりては...  
 けりては...  
 けりては...  
 けりては...  
 けりては...  
 けりては...  
 けりては...  
 けりては...  
 けりては...

小焼うけ道田名丸の家を  
 つむと割し母を礼記におう  
 ね嫁しきい美を夫おひ  
 その身は比のそくはふべ  
 男姑を生れ父母と思ひ  
 かはき孝書送し小男

小姑の親こそ家れ親  
 老親の附合まぐ和さ  
 睦びまら外事をつとめ  
 妻も肉子を治るの法を  
 男女の家来よまする侍  
 慈悲懇乃誠言城及し



てはまはりのすまはれ  
る滅くれば秋の徳者  
たのき持いとちり  
か

孤婦武子

町の秋の片まよ  
何となくさびしき

おはすかりそあはも  
そのまよふにせむ  
は十はみ家  
父母よこれ家  
おはすかりそあはも  
そのまよふにせむ  
は十はみ家  
父母よこれ家

家事は五婦よあれら  
繁昌富その基もく里  
方れ親兄弟もんを安ん  
是も孝乃の一場あれ容め  
の事からに

一近鄰の附合方切り公茂

利の多し多云利はあらん  
婦人乃大座あり詩経  
婦の長舌ありと嫌ふと  
回書は北籬の晨は秋  
家の聲あり坐あり文智  
豊明の生篋よりくも夫を

蓮の上花

露のうら

これであらむこと

世の佛も

これとまゝなる間

もまゝにけること

母の年忌あはれり

なる日傍を待す侍

あはれりてそ家のゆれ

ふるさなをうけて

あはれりてむむきや

うあはれりてむむき

あはれりてむむき

あはれりてむむき

あはれりてむむき

あはれりてむむき

あはれりてむむき

あはれりてむむき

あはれりてむむき

あはれりてむむき

あはれりてむむき

あはれりてむむき

あはれりてむむき

あはれりてむむき

あはれりてむむき

あはれりてむむき

あはれりてむむき

あはれりてむむき

あはれりてむむき

あはれりてむむき

あはれりてむむき

あはれりてむむき

あはれりてむむき

あはれりてむむき

あはれりてむむき

あはれりてむむき

あはれりてむむき

あはれりてむむき

あはれりてむむき

あはれりてむむき

かき遅る女まなこの事こととあり

敗やぶの事こととあり漢乃呂后かんのみりこう

唐たう比ひ武則天ぶそくてん我わが於お身み

孝かう謙けん女にょ帝てい沖おほ判はん發はつののち後のち

氏あひま君きみののち重ちゆう祚そ祿ろく徳とく尼に帝てい

武ぶ家けののち孫そん念ねん平へい尼に公こう

先せん繼えんののち事こととあり

一ふ婦ふ女にょののち嫉あやま妬とののち念ねんののち稀まれ也なり

夫おつとののち底そこののち念ねんののち去さとあり

本ほん又またののち事こととあり

縁えんののち事こととあり

家けののち事こととあり

一ゆりく後ある  
 富家にてはるる  
 たりはえなるはもの  
 人とゆくりはれ  
 是く孤女を  
 了向るそれの物



一ゆりく後ある  
 富家にてはるる  
 たりはえなるはもの  
 人とゆくりはれ  
 是く孤女を  
 了向るそれの物

一ゆりく後ある  
 富家にてはるる  
 たりはえなるはもの  
 人とゆくりはれ  
 是く孤女を  
 了向るそれの物

女五目

出く丈夫恥くもあり田方  
 一族また恥辱を多し面目を失  
 へむよしく忘れはんと老む  
 一海く深のき祖は皇后成  
 呂后と中 高祖くはれぬ  
 のちの天下は政務を失くす

ひく不どろの發明乃女性  
 おれども生質嫉妬ふく  
 一祖の妾を戚主とみひ  
 一二代め惠帝は母あり  
 呂后の妹を呂須といふ樊  
 吟の書あり此婦も妬強き

女五目







婦らひる今現よ  
有羽の意塚と極是  
ういし回らり盛遠  
後子之雄の文字  
上人返へのち不夫  
奇の俊業坊とて  
名をすえざる傍と  
成りたりは存業  
汝が孝貞のたより  
万代よかるとをれを  
紗一る

常磐御前

左馬次深義松の  
妻一て今若し若  
牛若三人の母とて  
養育ひのち  
法盛色二つてこれ  
と六は存ふたとい  
とも盛貞貞後成  
ちりてた多た一々  
伏見里みわくる法  
盛忠て老妻の母と  
とらて善き人の母の  
命と助らん止る紙  
ゆを清りの心とて  
母の命と救ひ三人の  
命を助らん止る紙  
の及を金ヶヶ表  
よ貞女と捨くる余  
様と中ぐら後文  
の子成りて平家  
の門とておひの

ある世帯の所もも祿ある  
士以上のとされも妻あり  
子形く妻とせの定法あり  
然るに分限するて唯慰乃  
存のそに妻と抱寵遇中妻  
おまされば夫は宅成頼え

妻と有りせりは夫礼のそ成  
おと更されと割さぬを自  
下は差別おく家事を乱  
の始奈り夫の扱まおれ極  
祖練すると世にあり  
嫉妬の念を離まき実を

女式目

廿三





杉村と申すありし  
 より文治元年十月  
 十七日（三）の依訪昌俊が  
 堀川の所正と杉村  
 せし時（四）杉村は  
 を掃く（五）て義仲よ  
 繼いであさせその身  
 も藤刀をわづらん  
 て故郷をせんとされ  
 けり（六）義仲は  
 けり（七）大物浦に  
 あり（八）て義仲の  
 あり（九）て義仲の  
 あり（十）て義仲の  
 あり（十一）て義仲の  
 あり（十二）て義仲の  
 あり（十三）て義仲の  
 あり（十四）て義仲の  
 あり（十五）て義仲の  
 あり（十六）て義仲の  
 あり（十七）て義仲の  
 あり（十八）て義仲の  
 あり（十九）て義仲の  
 あり（二十）て義仲の

一人の私書（一）を伺（二）どと云（三）い（四）る（五）礼法  
 母（六）い（七）ふ（八）と（九）け（十）り（十一）誰（十二）も（十三）と（十四）け（十五）た（十六）文（十七）を  
 書（十八）く（十九）を（二十）懐（二十一）傍（二十二）より（二十三）現（二十四）み（二十五）る（二十六）と  
 不（二十七）礼（二十八）と（二十九）法（三十）よ（三十一）か（三十二）  
 一不義密通（三十三）の艷書（三十四）の取（三十五）  
 次（三十六）を（三十七）あ（三十八）ら（三十九）し（四十）と（四十一）わ（四十二）ら（四十三）し（四十四）ま（四十五）し（四十六）公（四十七）より（四十八）

らば（一）若（二）聖（三）の（四）懸（五）傍（六）  
 ち（七）の（八）捕（九）ら（十）れ（十一）母（十二）を（十三）  
 と（十四）も（十五）の（十六）鎌（十七）倉（十八）よ（十九）送（二十）ら（二十一）  
 れ（二十二）る（二十三）安（二十四）達（二十五）流（二十六）れ（二十七）  
 れ（二十八）ら（二十九）れ（三十）く（三十一）義（三十二）仲（三十三）が（三十四）け（三十五）  
 り（三十六）と（三十七）ま（三十八）じ（三十九）く（四十）拷（四十一）問（四十二）  
 せ（四十三）ら（四十四）し（四十五）と（四十六）い（四十七）ま（四十八）も（四十九）吉（五十）房（五十一）  
 より（五十二）末（五十三）の（五十四）幸（五十五）を（五十六）あ（五十七）ら（五十八）ぬ（五十九）  
 ち（六十）を（六十一）せ（六十二）や（六十三）ま（六十四）し（六十五）て（六十六）け（六十七）る（六十八）  
 れ（六十九）れ（七十）及（七十一）び（七十二）は（七十三）義（七十四）仲（七十五）の（七十六）不（七十七）義（七十八）  
 政（七十九）を（八十）あ（八十一）ら（八十二）け（八十三）り（八十四）て（八十五）静（八十六）が（八十七）  
 新（八十八）曲（八十九）の（九十）巻（九十一）れ（九十二）を（九十三）あ（九十四）ら（九十五）け（九十六）て  
 義（九十七）仲（九十八）の（九十九）そ（一百）の（一百一）あ（一百二）ら（一百三）け（一百四）て  
 け（一百五）れ（一百六）ら（一百七）も（一百八）静（一百九）が（二百）け（二百一）く（二百二）歌（二百三）  
 とい（二百四）く（二百五）ふ（二百六）鎌（二百七）倉（二百八）の（二百九）不（三百）義（三百一）  
 仲（三百二）の（三百三）あ（三百四）ら（三百五）け（三百六）て（三百七）あ（三百八）ら（三百九）ぬ（四百）

女三目  
 七三  
 十六  
 十六

大石の墓居るまの  
 く今松と暮らうこ  
 んと別宮殿は如  
 摩てこしむもの  
 あうと事なるを  
 三度きかたて辨  
 なる母ある破神脚  
 今何やうけごん  
 ま我のあはれな  
 るるかじと徳め  
 され母の言葉乃  
 いふみかして後  
 松の神あまて  
 今松とうぬま  
 むやうこの小曲と  
 恨ひなき



和方と縁む  
 う乃むもの  
 あり重き  
 入り一の  
 後ぞなき  
 ことなうそ  
 恨ひ又なき

女目

あり何の悪事なま公り  
 怖あぐらむかんの人あれが  
 心安く悪事と為逆るま  
 その濟智中人よりかりと  
 治心を頼り河控あり  
 一如る家形く史の家と我

おとする老女嫁入るる我  
 嫁とといふ又歸と云嫁道  
 己があふ内れ素ありをれを  
 父母の家で出る何死者をさ  
 送り如く後を撒帯出れ  
 いを何の再帰る内でもれ

女目

廿七



幸田満行の女

海防の儀、徳川國の公之  
おのづから志を遂げしむ  
以て、後余の後、  
是れ成成、  
ありぬ、  
そ、乳母と志を合  
白相と、  
さ、  
つて、  
徳軍と、  
ち、  
ま、  
あ、  
び、



依る、  
ぬ、  
と、  
あ、  
み、  
佐々木嚴流女

此の嫁と縁付の家、  
増りたる家、  
ト理あり

己と親と子と三親と  
親の兄弟己が兄弟子孫  
この三股に出る族と三族と

己より上は父祖、  
子孫、  
孫、  
九股あり、  
と九族といふを、  
遠く、







殺報... 殺報... 殺報...  
 殺報... 殺報... 殺報...  
 殺報... 殺報... 殺報...

竹氏 孝女  
 越後... 越後... 越後...  
 越後... 越後... 越後...  
 越後... 越後... 越後...

女

身を死父と知りしを以て  
 又親を母と知りしを以て  
 縁若くは嫁を縁付婿と  
 知るは子同前あるも血脈  
 あり婿の妻のあり親を舅姑  
 として父母の如くこれをとも

肉縁あるれば縁者なり  
 農高乃若別知ぬは妻は  
 里方の死妻ありても親類  
 の心中といふ類ひまこれ  
 何り婦女より出ても親類遠  
 類縁若くは三族九族の伏也

孝のぬれぬる家  
夜更に  
孝女の中身不浄な  
そののど見物の入  
方のの母のうら  
せめてをまき  
せだのたの難  
作の美あごとを  
一日も母の心を  
せんといふ心  
いふにたれども  
行那ましく  
孝女は



孝女は  
神仏の母の命  
念ふに成り  
に天の  
とれぬ  
を

父母かきて先居る  
いし一聖賢乃教  
忠臣二君の事  
主事とて心  
主人と教  
五代替は一  
再嫁の法  
はら禄を  
千石賜  
二千石を  
主人か  
後代わ

再嫁の法  
はら禄を  
千石賜  
二千石を  
主人か  
後代わ







姉をよむ白衣狼  
と名をてきと出  
れば姉由おれれ  
と白小袖をきき  
姉の泣と悲を  
泣の悲とまろつ  
き若君をわい  
て移りて娘と生れ  
そわそわいける  
父を闇夜の遠  
目とられて足解  
病なるとおりの  
乃れを鉄炮をね  
らひすぬしとく  
をこと打よあやま  
るは娘は娘後を打

ぬきたる娘の中うこ  
うく娘と足付て娘  
らうよ父の娘の中  
ど二羽の鶴を打れ  
二羽の鶴の飛ぶ  
鶴とぶるこそ春  
るれと又鉄炮をう  
率一親ひを定め  
おたるよ哀むべし  
妹も拍板を打通  
色回ト枕を休ら  
る父の志をま  
うとと悲ひと  
るふふ入くたご  
乃れこのころは  
あつて我々この

るのむらた定法ありむう  
西國方藩中の武家同輩  
の娘を妻とて此家下女乃  
甚年の春より抱へて我  
妻とて農人の娘あり妻を  
迎へて當分の賤くくええ

けるが主懇切に妻を愛して  
奴婢一同に妻を重んず妻の  
如くは然るに迎へて中業の  
元來武士乃娘を名りの  
第乃も毎一柔順の生簀は  
く者も仍儀化法も禮









万葉集卷之九 秘傳

并ふたゝまの

○小袖の垢をわす  
み白小豆を粉  
水をもみそ  
水をうす  
る華を  
扱ひ  
熱湯の中  
粉と葉  
か  
んを  
ま

○梅油の粉  
て  
か  
ア  
滑石の粉  
の上  
は  
火  
な  
但  
又  
あ  
こ  
す  
又  
あ  
こ

同藩の士有死人はにあられた  
是より事露頭領主の  
吟味して明細を知せぬとも  
事み起りかか妻女親元  
在り内は同僚の若者必しを  
かき人多しと云く父母乃

及正しき家の名乃あらぬ  
と云娘も顧す惣事せしもの  
共り合せ縁を案縁付  
先を妻を娶くと云く  
其親と人成合せ途下  
妻夫を嫌ひ親元へ返す

新撰

三十一



る要上の紙と  
うつろり紙と  
くとり勢ぐ

○紅染藍染よあ  
漏れをよとをよ

塩湯よすくぐ  
ゆる法よ水よあ

○白垢垢つた  
をよよよよの

○藍の色をよす  
水よよよよよ  
たる地よよよ

○葉際をよす  
酒よよよよよ

○衣服よ蠟の  
よよよよよ

紙よ色よらうの  
よよよよよ

押よよよよよ

きよよよよよ  
よよよよよ

氣運く目よなれ働く肝

魂を死したる次身妻の親

子の金をよきして事を計を

るがまじ経よる迹よりく

妻の持よる不実言をゆらり

したり三人謀を合せ一人の

娘を貴徳その人好をよる

小夜よかあくお次を以てそ

名残通よれども文よ請付

さるおやよはよ一旦親元へ向

らら誰がよれ入ることも働

次身意地づくよそも今の



○又方米のあらしひ  
 けしきせし下ゆま  
 中より七日干し  
 粉とて湯をつま  
 ころし又の湯をあ  
 へて粉とぬす  
 ○又まんぢもさびの  
 根を日干し粉と  
 してぬす候か  
 けしきせし洗ふ  
 ○あつがせむむ  
 あつがせむむを  
 せんべい水うす  
 まる石搗の皮をせ  
 んどしてひんあつ  
 ぐりーあつがせむ

なるりあつ  
 ○洗の付るを  
 すまの焼くを  
 らんべい  
 又方麻のあつ  
 あつがせむ  
 ○衣服は煙を  
 やふの舟を  
 すまの白粉を  
 あつがせむ  
 ○煎餅の小便  
 どかすを  
 らんべい  
 湯入るを  
 せしきせし  
 せしきせし

粉のひも晒ぬるぬまのひ  
 わる毒の信うよしう  
 家事を礼せりあを親元  
 渡し親子出入せしめ  
 先より家事治り又帰  
 く業えりあを毒を  
 出かやく家を礼す事  
 ちづる妻の眉目容の吟味  
 次りく業和随順を  
 把針の業を並せしを需む  
 其の才發伶俐を孝福次第  
 是れ始より為る初る

出かやく家を礼す事  
 ちづる妻の眉目容の吟味  
 次りく業和随順を  
 把針の業を並せしを需む  
 其の才發伶俐を孝福次第  
 是れ始より為る初る

○白木の櫛の赤く  
びらんの櫛の汁す  
て付洗ふ

女けしやうの巻

女の髪はめくさる  
こそ人の目くらま  
とほもくすよれ書  
これ女風流の才  
へ髪より髪はかき  
おれ短きくたたと  
細きくくぬれつき  
こそ是れうしり  
髪くまらぬまら  
ゆきまらぬけぬる  
一髪のはやくう  
くしくぬれか

くさるあはれあは  
あれどもよくあ  
る相おれ女中の  
別くたあまた  
まらうあま  
く髪はやく  
そつてはせあ  
こねづだ  
一髪はやくあ  
油をつゆあし  
あはれあは  
ひさうげくは  
中身のあま  
ひさうげくは  
白ひあき油を付  
くさるあはれあ

多しよく家を治るに  
金玉は換る家の至  
実なるまのあり

子で育る事男子を  
藝術徳方立廻りやと父母の  
丹後よゆると古格よ父教られ

どその子智はとりの女子  
母の精誠を以てまの  
仕法多し業の手習は  
とも家身一次は把針琴  
線その外音曲の身分にも  
あべし和あはれ園女あ





けいせいめつあめあや  
 ちかきくまげら  
 目ふまふ袖のま  
 からびやうまのま  
 てまのまのま  
 ねふゆひのま  
 後田うらむいともれ  
 うらむ田舎めめら  
 牡丹の花のまのま  
 肉ふまのまのま  
 けりけるむの花  
 お後のやこま  
 うらむまのま  
 うらむまのま  
 うらむまのま  
 けりけるむの花  
 お後のやこま

けいせいめつあめあや  
 ちかきくまげら  
 目ふまふ袖のま  
 からびやうまのま  
 てまのまのま  
 ねふゆひのま  
 後田うらむいともれ  
 うらむ田舎めめら  
 牡丹の花のまのま  
 肉ふまのまのま  
 けりけるむの花  
 お後のやこま  
 うらむまのま  
 うらむまのま  
 うらむまのま  
 けりけるむの花  
 お後のやこま

正ましくは成せい者ちやうくは雙ふた親おや  
 辛あつ勞らうをかき花はなの身み世よのま  
 のめくもゆある花はなう

心こころまじき情なさけじ情なさけ  
 農家のうかの子こ耕かう作さくのたま  
 けりけるむの花  
 お後のやこま

と厭いとひ高あかれたよ子こ孫まご  
 出いすものありほ民たみよえ  
 士しの徳とく分ぶんよえは身みよえ  
 徳とくよえの儀ぎよえよえ  
 或あるの基もとよえ素もとよえ  
 遊あそ民たみの生まの仙せんよえよえ

ひびきのほろろやう  
おひびきよひびき丸  
ひびきよひびき丸  
さうあびびき丸  
人の生れつきぬき  
ト大教よ小教まる  
が不長さ教みす  
さ教とさうさひゆり  
あまー  
さうあまのあまのあま  
うすうとさう根の  
おまふまのうまの  
てまふびき丸  
よまふびき丸  
のまふびき丸

ひのこ鼻あて中ぞ  
みとあまのあま  
一眉ふまんとしん  
おまのうらみ強の  
のぐとりのつら  
うすうとさうあま  
さうあまのあまの  
くく六地花の教の  
あまーすぐあま  
けあまのあま  
あまのあまのあま  
くくあまのあま  
とみあまのあま  
おまのあまのあま  
あまのあまのあま  
あまのあまのあま

固<sup>くわむ</sup>の事<sup>こと</sup>能<sup>あた</sup>ぶらふれ始<sup>はじめ</sup>まり  
是<sup>これ</sup>より勝負<sup>しょうぶ</sup>賭<sup>く</sup>事<sup>じ</sup>のあを  
敗<sup>やぶ</sup>る族<sup>うぢ</sup>後<sup>おのち</sup>し親<sup>おや</sup>の任<sup>しつ</sup>付<sup>つけ</sup>よる  
かぬあまの女子<sup>おんな</sup>の書<sup>かき</sup>巻<sup>まき</sup>  
の業<sup>わざ</sup>系<sup>けい</sup>採<sup>と</sup>織<sup>おり</sup>機<sup>か</sup>はらあま  
母<sup>はは</sup>乃<sup>の</sup>教<sup>しゆ</sup>よよるあまのあま  
高<sup>たか</sup>家<sup>け</sup>は子<sup>こ</sup>あのかのくそのあま  
体<sup>てい</sup>の及<sup>およ</sup>びいあまのあま  
分<sup>ぶん</sup>算<sup>さん</sup>教<sup>きやう</sup>の松<sup>まつ</sup>古<sup>こ</sup>懶<sup>ね</sup>怠<sup>たい</sup>あま  
女<sup>おんな</sup>子<sup>こ</sup>のあまのあま  
東<sup>あづま</sup>らうあまのあま  
降<sup>くだ</sup>瑞<sup>みづ</sup>璃<sup>り</sup>簪<sup>かんざし</sup>古<sup>こ</sup>の事<sup>こと</sup>のあま

高<sup>たか</sup>家<sup>け</sup>は子<sup>こ</sup>あのかのくそのあま  
体<sup>てい</sup>の及<sup>およ</sup>びいあまのあま  
分<sup>ぶん</sup>算<sup>さん</sup>教<sup>きやう</sup>の松<sup>まつ</sup>古<sup>こ</sup>懶<sup>ね</sup>怠<sup>たい</sup>あま  
女<sup>おんな</sup>子<sup>こ</sup>のあまのあま  
東<sup>あづま</sup>らうあまのあま  
降<sup>くだ</sup>瑞<sup>みづ</sup>璃<sup>り</sup>簪<sup>かんざし</sup>古<sup>こ</sup>の事<sup>こと</sup>のあま



夜通帳小辨小町と  
 ちどめとむらさきの  
 名をいふ人さあみ  
 白粉せけまひ  
 あふり物も秋  
 ちもつてさういせんや  
 つの女をわある程  
 あるる白粉を  
 うすくとしく  
 よくぬぎひえあふ  
 べし白くとぬくと  
 耳のあつら鼻のこ  
 きむじりくこのこ  
 せむるくこのこ  
 のあり白粉り  
 くらげにねまも



人ら善悪の友なる世を  
 枯言聊多しなりこれ  
 人乃親も姑もせん  
 何る能うは  
 祖父祖母の孫をわうむ  
 之を甚く却る新儀乃

た老よあぬとも何の世の  
 後と祖母育まといふ是也  
 老人も世所も人皆しある  
 あり四民とも幼少の子は  
 何法うひより起居の儀を  
 教一人来るが男女の儀は







あとわろふ不孝の  
 舟つらう 至子といふ  
 賢人も後をたて不  
 孝とすまのこゝろ  
 男の女どりとむ  
 のをさまうけ先程  
 のわととたやさげ  
 家のうちをむき色  
 人おえ何のこゝろ  
 つまやくをばまひ  
 せふふふれと妻を  
 りんめふあふだ  
 よろそけとさるれ  
 七の法の子をぬ  
 女屋一ツあるあそ  
 ぶべーあるまてま

女式目

趣向の戯場より五能狂言  
 たりく積好く研蓋を得ず  
 実事を礼と認む小野道  
 吾番色の公家成ると云  
 以美あは小見をあけ信と  
 らば海よ毒を遠くもいふ  
 遊しつらも益如く却て害  
 何るまきのりのもあられさるる  
 間うらま本つ初美盤つ初も  
 さうらぶ男は益あらん書と  
 いふまのいたと穂粘の法と  
 書つらうも先説あれ用

あとわろふ不孝の  
 舟つらう 至子といふ  
 賢人も後をたて不  
 孝とすまのこゝろ  
 男の女どりとむ  
 のをさまうけ先程  
 のわととたやさげ  
 家のうちをむき色  
 人おえ何のこゝろ  
 つまやくをばまひ  
 せふふふれと妻を  
 りんめふあふだ  
 よろそけとさるれ  
 七の法の子をぬ  
 女屋一ツあるあそ  
 ぶべーあるまてま

女式目

子どし生ぬぬふまゝの  
虚実あつるものえ  
バも味あつたものあり  
稗史虚るれふ子  
争むとあつて又まけ  
と六血魂接取  
下等の病ありて  
ふれらぬものあり  
推れが女とせられて  
聖一人の位ぬく極  
さらしたる年  
けつと愛人の婦  
とあるものあり  
つひよ方の書け  
とこころをい  
を極めんとする

おまのあつて一様  
しつとあつて  
の書生食物取  
まてらつたものあり  
つひよ方の書け  
とこころをい  
を極めんとする

あるづ〜州雙帝をうり  
ゆき〜用あり害あるさ  
形りを来生他意小兒の  
美よわらばとて男女大人  
るるさあり疎費〜く何  
ひとの善を好む心さうあ

支那の人も人さの似るを  
て元の時施耐庵忠義  
水滸傳の百回本を他  
門の金聖歎の神史の英  
雄使者の事記たふれ





懐妊の時分の持株  
并に食物の吉あり

二三月月經水きた  
らば懐妊と  
ききしはうらむ時  
相見らるる

嘔吐痰を吐く  
食をえりし  
あつはききぬ  
あり是を悪毒と  
みる

まじり月とこも  
れをみるもの  
いふ

十月があひ  
の候つ

みればあつを  
不目より  
やんばかりと  
のも聖人けんの  
とてさき  
よむ  
あつはききぬ  
はよあ  
つひを  
三居  
くく  
は  
て  
の  
と

父母代人家より年若る

今を教ふるを辨じ師を

ありえ物とおつ日本に生

る若く我國の事業

福を先え次は震且聖賢

の事業事業歴を

了家を出る傍と形あり

扱ふ日中在家のあり

氏母の教ははる

有るに儒教を随ひ唐山

此を明あれも肝心已

生れ日本はを何を



嘉永五年壬子春二月上梓

江戸

日本橋南町式丁目

須系屋茂玄清

日 南町式丁目

須系屋新玄清

浅草茅町式丁目

須系屋伊八

日本橋南町式丁目

山城屋佐玄清

芝罘明前町

恩田屋嘉七

本石町十軒店

英屋大助

芝罘明前三ツ橋町

和泉屋市玄清

浅州福井町表町

山崎屋清七

通 油 町

森園屋慶治郎

弓喰町式丁目

森屋治玄清板

書林



書 卷 江 卷  
風 雲 日 月  
山 水 花 鳥  
松 竹 梅 蘭  
琴 棋 書 畫  
詩 詞 歌 賦  
雜 著 類 書  
經 史 子 集

大正五年



大正五年

